

Medical Tribune 創刊50周年企画

明日の医療を読み解く 50 の未解決課題 No.14

自宅で実現する 「安らかな看取り」



認定NPO法人「新田の風」理事長
い内科クリニック
院長 井 益雄

未解決の背景

家庭介護力が著しく低下

認知症になっても要介護者になっても、最期まで自宅で暮らしたいという高齢者は多い。しかし、現代の日本社会において家庭介護力の低下は著しい。どんなに医療・福祉を充実させても介護力の補強とはなりえず、病院や施設を転々と移り亡くなっていく人々が後を絶たない。「身内での在宅介護を」という考え方方は、もはや成り立たない時代になってきている。

解決することの意義

医療・福祉の最終ゴールに

人には必ず最期が訪れる。そのときを住み慣れた自宅で迎えたいという願いは一番多い。それをかなえることは医療・福祉の最終ゴールとなりうる。また、意に沿わぬ終末期を過ごさせることにも大きな意義がある。さらには後世への負担軽減にもなりうる。

私の解決法

住民主体の地域包括ケアシステムの確立

私は病院勤務医時代に、入院患者から「家に帰りたい」「死んでもいいから帰らせてほしい」「帰りてえ！」と嘆願されることが多々あった。願いはかなわず、亡くなって初めて家に帰れた人々を数多く見てきた。どんなに在宅医療体制を充実させても、このような方々を救うことはできないと思い知らされた。

その最大の要因は“家庭介護力”的低下にある。

そこで考えたのが医療・福祉に住民を巻き込むという発想である。地域住民と医療・福祉の専門家ががっちり力を合わせ、家族のみの介護から、家族も含めた地域全体で支え合う介護の実現を目指している。すなわち、住民主体の地域包括ケアシステムの確立である。

長野県上田市で活動を始めて7年目に入る認定NPO法人「新田の風」が中心となり、地域住民、医師、薬剤師、ケアマネジャー、小規模多機能施設スタッフが一丸となって支える仕組みである。その中で次のような2つの柱を立てた。

- 1)たとえ介護者がいない人でも、本人が望めば最期まで自宅で支える
- 2)最終ゴールは「安らかな看取り」

これを実現させるための方法論を次に挙げる。

- ①まずできる限り多くの住民同士がしっかり交流し、仲間づくりをしておく(最重要)
- ②手助けが必要になれば、医療・福祉の専門家の誰かがコントロールタワー(司令塔)となり、医療・福祉・住民による支援チームをつくり、その人と家族を支える
- ③問題が生じその支援体制では支えられなくなれば、支援チーム会議を開き、改良を加えた新たな支援体制をつくる(必要に応じてこれを繰り返す)
- ④支援される人の希望を、あらかじめ「いのちの選択」(事前指示書、図)、「人生のしまい方」(エンディング

〈図〉「いのちの選択」*の一部

(病名・病状の告知について)

- | | |
|--|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 本人にのみ知らせてほしい | <input type="checkbox"/> 家族のみに知らせてほしい |
| <input type="checkbox"/> 家族と一緒に知らせてほしい | <input type="checkbox"/> 決めていない |

(余命の告知について)

- | | |
|--|---------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 本人にのみ知らせてほしい | <input type="checkbox"/> 家族のみに知らせてほしい |
| <input type="checkbox"/> 家族と一緒に知らせてほしい | <input type="checkbox"/> 決めていない |

(終末期の医療について)

- | | | |
|--|--------------------------------------|---------------------------------|
| <input type="checkbox"/> できるだけ望む | <input type="checkbox"/> なるべくしないで欲しい | <input type="checkbox"/> 決めていない |
| <input type="checkbox"/> 家族に任せる(家族の判断で、延命治療を打ち切って構わない) | | |
- *終末期：生命維持の処置を行わなければ比較的短時間で死に至るであろう、不治で回復不能の状態

(終末期での、望む生命維持処置)

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 心臓マッサージなどの心肺蘇生 | <input type="checkbox"/> 人工呼吸器 |
| <input type="checkbox"/> 胃ろう | <input type="checkbox"/> 延命の措置は望まず自然死を希望する |
| <input type="checkbox"/> すでに「尊厳死宣言書」を作成した | |
- *胃ろう：流動食などを、腹部から胃に直接通したチューブで送りこむこと

(最後の時はどこで迎えたいか)

- | | |
|-----------------------------|----------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 自宅 | <input type="checkbox"/> 施設および病院 |
|-----------------------------|----------------------------------|

*上田薬剤師会との共同事業による、お薬手帳にはさめる事前指示書
(井益雄氏提供)

グノート)、「おもいをつなぐノート」(認知症になったときに活用)*などに記載し準備しておき、その願いがかなうように支援していく

⑤やがて自分自身が支援される立場になれば、遠慮なくお願いをする(支えられる側になる)

⑥最終ゴールは「安らかな看取り」

具体的には、「認知症を支える事業」「住民および上田北小学校児童との交流事業」「小規模多機能居宅介護施設支援事業」などのチームに分かれ活動している。

とにかく仲間づくりが重要であり、認知症や終末期に対する住民の意識レベルを上げることである。国が、医療が、福祉がなんとかしてくれるという他力本願では救われない。自分たちの将来は自分たちでなんとかするという強い意識を持った地域住民が自立し、支え合うことである。そして最終ゴールは「安らかな看取り」とすることで完結する。

*「いのちの選択」、「人生のしまい方」、「おもいをつなぐノート」は、「新田の風」が独自に作成したもの